

2022年4月28日

志賀原発を廃炉に！訴訟 原告意見陳述

種井一平

私は全国一般石川地方労働組合に所属し、この間、脱原発運動に携わってきました。3点にわたり意見を申し上げます。

3月16日深夜に福島県沖を震源とする地震が発生し、東京電力・福島第一原発2号機の使用済み核燃料プールにつながるタンクの水位が一時低下しました。また5号機でもポンプが止まり、使用済み核燃料プールの冷却が停止しました。

廃炉が決定し、運転はしていないものの、危険な状況が作り出されました。核燃料の冷却が出来ないことなど想像さえしたくない事態です。福島第一原発の危険は今もなお去っていないどころか、現在進行形の危険です。

地震大国の日本では、今後、幾度となく地震は発生します。廃炉作業は2011年から最長40年と計画されています。残り29年間、常に地震に備え、一度としてミスの許されない状態を維持していかないとはいけません。

先日の報道で廃炉作業自体が困難を極めていることをあらためて痛感しました。事故から11年を経て、ようやく今年中に2号機からの核燃料デブリの取り出しが計画されているにすぎません。原発を見下ろす高台でさえ、10時間で一般人の年間許容量に達すほどの放射能が検知されていました。高濃度のデブリには人間は近づくことさえできません。取り出しが容易でないことはすでに明らかです。そしてたとえ取り出したとしても処分先はないのが現実です。

そもそも東日本大震災と原発事故により、今なお多くの福島の方が、3万3千人を超えるとされる多数の人々が故郷に帰ることが出来ず、避難状態にあります。戻ることをあきらめざるをえなかった方も少なくありません。原発事故のもたらす悲劇と被害の大きさをあらためて感じざるをえません。

しかしそれでもなお原発の再稼働が行われています。事故の危険にさらされ続けているというばかりではありません。処分も安全な管理も出来ない使用済み核燃料や汚染物質を大量に作り続けています。そして原発で働き被曝する労働者を日々大量に生み出し続けています。一刻も早い原発の廃炉の決定を行うべきです。

ところで2月24日に、ロシアのプーチン政権がウクライナに侵攻し、その後、チョルノービリ（ロシア語でチェルノブイリ）原発、ザポリージャ原発への攻撃を行いました。幸いにして核燃料が外に漏れ出るといった事態にはならなかったとされています。しかし

破滅的な事態一步手前でした。報道に接した時、私はかつてのチョルノービリ（チェルノブイリ）原発の爆発、2011年の福島第一原発の爆発などを想起しました。まさに背筋の凍る思いでした。

原発の建屋や隔壁がたとえ頑丈であったとしてもミサイルや戦車の砲撃には耐えられません。しかしながら原発が実際に軍事攻撃の対象になると想像していた人は多くはないと思います。でも現実には起こりました。大惨事にならなかったのは結果にすぎません。原発の危険性がまたひとつ明らかになりました。破滅一步手前の危機とともに明らかになったのです。ウクライナの事態は、普通は起こらない、あれはプーチンがいたから起こった特別なことだと言うことはできません。東日本大震災も、福島第一原発事故も起こらないと言われていたのです。原発の危険性を論じる際に想定外などと言うことは出来ません。

脱原発運動に携わる中で、原発と原爆の原理が根本的には同じであり、原発の保有は核兵器開発の技術を保有することであると学びました。原発はエネルギー問題であると同時に、軍事と平和の問題なのだと教わりました。今回のウクライナ侵略の中でプーチン大統領は核兵器の使用にも言及しました。その可能性は未だに排除できません。そしてヨーロッパはおろか被爆国日本においても、核兵器の保有が公然と叫ばれ始めています。私は平和の観点からも原発に反対します。いかなる理由をつけようが認められません。

最後に、3月11日を前後しての報道を通じて、東北各地を中心に東日本大震災から復興へと奮闘する多くの方の姿に接します。しかし特に福島県では原発事故は避けて通れません。復興以前に自宅へ戻る目途さえ立たない現実を突きつけられます。

原発についてふりかえると、私が原発の危険を多少なりとも感じたきっかけはチョルノービリ（チェルノブイリ）事故だったように思います。高校生になったばかりで原発に特段の関心もありませんでしたが、それでも事故を目の当たりにし、大量に漏れ出した放射性物質が世界各国へと拡散していくニュースに恐怖を感じたことをおぼえています。そして日本の原発は型が違う、技術力が高いから大丈夫と宣伝されていたように記憶しています。

しかしその後、日本でも美浜原発2号機の細管破断などの事故が相次ぎ、果ては高速増殖炉もんじゅのナトリウム漏れ・火災事故が引き起こされ、同時に事故の隠ぺいも明らかになりました。私が所属する労働組合では、毎年12月初めのもんじゅ廃炉を訴える現地集会に出かけ、私も廃炉を寒風の中で訴えてきました。もんじゅは結果としては廃炉となりましたが、悔しいことに安全神話を拭い去り原発の停止や廃炉を実現することは出来ず、多くの原発は動き続け、そして東日本大震災の直撃で福島第一原発事故が引き起こされました。

原発の危険が現実をもって明らかになるということは事故がおき、そして甚大な被害が

出ることを意味します。大惨事一步手前の事故は何度も起きました。しかし結果的に被害が大きくなければあるいは被害は大きくなかったとして、結局は安全だった、安全に動かせばよいのだと政府や事業者が強弁し、原発は動かされてきました。だが被害が出てからでは遅いのです、取り返しがつかないとはまさに原発事故のことです。

福島第一原発の事故までに一体いくつの事故があったのでしょうか。一体どれほどの隠ぺいや事実の歪曲や改ざんが行われてきたのでしょうか。一体どれだけの地域社会が原発により分断と対立に追いやられ、どれほどの原発労働者が被曝に苦しんできたのでしょうか。福島第一原発事故を本当に最後にしないといけないと思います。

志賀原発廃炉への裁判所の判断が速やかに出されるよう強く求めます。これ以上の裁判の引き延ばしは到底納得できません。原発の危険、大惨事が現実起きたこと、事故の結果もたらされている被害と悲劇、どれだけの主張を行えば、私たちの声は裁判所に届くのでしょうか。司法の責任が問われています。直ちに結審し、廃炉に向けた判決を出すことを重ねて求め、私の陳述とします。

以上